7 古文

学習のねらい
① 古文を解釈する
② 事実関係をとらえる

1 **次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。**

ある所に＊めうがの＊さしみありけるを、児これをつまみ食ひけるを、そばなる人申すやうは、「①これをば昔より今にいたり、物読み覚えむことをたしなむ人は、みな鈍根草と名付け、物忘れするとて、かたく食はぬ物じや。」といひをしへければ、児聞きて、「②それならば、おれは、なほ食ふべし。③＊ひだるさを食ふて忘れむ。」といふ。

（注）めうが＝食用にする植物の名。みょうが。
さしみ＝新鮮な生のものを薄く切った料理。
ひだるさ＝空腹。

〈「軽口露がはなし」より〉

□(1) ――線①「これをば昔より今にいたり、物読み覚えむことをたしなむ人は、みな鈍根草と名付け、物忘れするとて、かたく食はぬ物じや」とありますが、これを要約して、「**～は、～ので～ものだ。**」という形で、二十五字以内（句読点も字数に数えます）で答えなさい。

□(2) ――線②「それならば」とありますが、「それ」は何を指していますか。「**～ならば**」という形で、二十字以内（句読点も字数に数えます）で答えなさい。

□(3) ――線③「ひだるさを食ふて忘れむ」を、何を「食ふ」のかを明らかにして、二十字以内（句読点も字数に数えます）で現代語訳しなさい。

2 **次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。**

うぐひす、いとうつくしき巣を作る。鳩、「①これを習はん。」と思ひて、うぐひすに近づきて、巣の作りやうを見る。うぐひす、竹ぎれ、柴の折れを敷きわたして、その上に巣をかくるが、②それまでも見とどけず、竹、柴をわたしたるばかりを見て、「＊」と思ひて、おのれ巣を作る時は、木の枝に柴の折れ四、五本をわたし、その上に木の葉を敷きて卵を産む。卵、柴の折れのあひだよりもれ落つ。伝へられたるを＊奥義にわきまへずして、ただ見たる、聞きたるにまかせて、よくも知らぬことなれども、すべて知りたる顔したるを、③鳩の巣にたとへたり。

（注）奥義＝その道やそのわざの、いちばん奥深くになるひけつ。

〈浅井了意「浮世物語」より〉

□(1) ――線①「これ」が指している内容を、十字以内（句点は字数に数えません）で答えなさい。

□(2) ――線②「それまで」の「それ」は、何を指していますか。「**～まで**」という形で、三十字以内（句読点も字数に数えます）で答えなさい。

□(3) ＊ に入る適切なことばを、十字以内（句読点も字数に数えます）で答えなさい。

□(4) ――線③「鳩の巣にたとへたり」とありますが、「鳩の巣」はどんなことのたとえとして用いられましたか。それを、①三十字以内（句読点も字数に数えます）で答えなさい。また、②これとほぼ同じ意味の四字熟語に「一知□」があります。この「一知□」の□に入る漢字二字を答えなさい。

3 **次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。**

ある男、わなをかけて鹿をとりけるほどに、ある日、大鹿かかりたりけり。この男思ふやう、かかる大鹿をわなにかけてとりたらんは無念なれば、弓にてぞとりたるといひて、弓の上手のよし人に聞かせんとて、①わなにかかりたる鹿にむかひて、矢をつがへて射たりけり。その矢、鹿にはあたらずして、わなにむすびたる＊かづらにあたりければ、かづら射切られて、②鹿はことなく、はしりにげてゆきにけり。この男、頭掻きをすれども、さらにえきなし。

（注）かづら＝つる植物。縄として用いた。

〈「古今著聞集」より〉

□(1) ――線①「わなにかかりたる鹿にむかひて、矢をつがへて射たりけり」とありますが、なぜこんなことをしたのですか。三十五字以内（句読点も字数に数えます）で答えなさい。

□(2) ――線②「鹿はことなく、はしりにげてゆきにけり」とありますが、なぜこんなことになったのですか。三十字以内（句読点も字数に数えます）で答えなさい。

□(3) この説話の主題を、三十字以内（句読点も字数に数えます）にまとめて書きなさい。